

自己点検・評価報告書

I	自己点検・評価の目的	2
II	大学院統合新領域学府の教育上の特徴	2
III	分析項目ごとの自己評価	4
	分析項目 I 教育の実施体制	4
	分析項目 II 教育内容	10
	分析項目 III 教育方法	17
	分析項目 IV 学業の成果	23
IV	ライブラリーサイエンス専攻の 新たな取り組み	27

I 自己点検・評価の目的

- 1 九州大学大学院統合新領域学府は、学問の細分化によって生み出された膨大な知を再編成し、統合的な新しい科学的な知や価値を追求して、現代の科学や社会が抱える重要課題の解決に取り組むことのできる高度な専門的人材の育成を図ることを目的として平成21年4月に新たに設置された学府である。本学府は、学府設置と同時にスタートしたユーザー感性学専攻、オートモーティブサイエンス専攻及び平成23年4月に新たにスタートしたライブラリーサイエンス専攻の3専攻からなり、いずれも我が国初の大学院専攻として、現代社会や現代の科学に問われている実在的な課題から出発するところに特徴をもつ。それぞれの専攻は国際的な学術拠点として知のフロンティアを切り拓きながら産業界の高度な人材育成への熱望に応える大学院専攻である。
- 2 本自己点検・評価の目的は、平成25年3月31日に学年進行が完成したライブラリーサイエンス専攻修士課程について、平成23年度から平成24年度の2年間にわたる教育研究活動を総括するために自己点検及び自己評価を行い、今後の統合新領域学府及びライブラリーサイエンス専攻の教育研究水準の向上を図るものである。

II 大学院統合新領域学府の教育上の特徴

- 1 本学府の教育目的を達成するため、本学府では以下のアドミッションポリシーのもと入学を受け入れている。

【アドミッションポリシー】

- ① 専攻の専門に係わる諸問題を学際的に解決し社会に成果を還元したいという意欲を有していること。
- ② 社会において先導的役割を果たしたいという意欲を有していること。
- ③ 柔軟な発想力、基本的なコミュニケーション能力、幅広い教養を有していること。
- ④ 社会人にあっては、企業や地域社会での経験、問題意識を大学において理論的に進化・体系化させたいという意欲を有していること。

このアドミッションポリシーに沿って、修士課程及び博士後期課程では一般選抜試験、社会人特別選抜試験、外国人を対象とした外国人留学生特別選抜試験を設け、多様な入学者選抜試験を実施している。

- 2 本学府ライブラリーサイエンス専攻の修士課程では、2年以上在学し、36単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、本学府教授会の行う修士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件としている。

これを基本方針とし、明確かつ厳正な単位認定を行い、学位を授与することとしている。

- 3 ライブラリーサイエンス専攻は、ICT環境の真っただ中におかれる現代情報社会の急速な進展に対応するため、ユーザーの視点に立った情報の管理と提供を確保し、同時に知の創

造と継承を支えるあらたな「場」（これを「ライブラリー」と呼ぶ）に求められる高度な専門人材を養成することを目的に設置された。本専攻では、ユーザーの視点に立った情報の管理と提供を確保し、同時に「知の創造と継承」を支えるあらたな「場」（＝「ライブラリー」）の研究、教育を開拓する。具体的には、図書文献資料、文書記録資料（アーカイブス資料）等の別なく、統合された方法論にもとづく、情報管理・提供の新たなあり方を研究するとともに、これを現場で担う情報専門職を養成している。このような新しいコンセプトに基づく大学院専攻は、我が国では初めて設置されたものである。また本専攻は、図書館情報学、記録管理学に関するマネジメント、サービス、コンテンツ、システムの基幹4領域を基軸に、法学、学習科学、人文科学等の関連領域を加えたヴァリエティのあるカリキュラムを提供しながら、実践型の教育を推進している。さらに、本専攻指導教員は、学生一人ひとりの適正に応じて、きめ細かい履修指導を行っている。教育方法にも工夫をこらし、専門分野を異にする複数の教員と学生が、共通のテーマに協力して取り組むチームランニング（PTL）やインターンシップ等を用いながら、実践的な知の習得を図っている。

- 4 これらの取組により、本学府におけるライブラリーサイエンス専攻の教育目的を実現しているが、今後も、学内外の変化に対応して教育目的の着実な実現を図るために、引き続き教育体制、教育内容、教育成果、学生支援などの改善・向上を図っていく。

Ⅲ 分析項目ごとの自己評価

分析項目Ⅰ 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

本学府ライブラリーサイエンス専攻では、学府の教育目的を踏まえて教育目的を定め、それに沿ったコースや分野を設定している。(資料1-1-A)

また、学府及び本専攻の教育目的は、九州大学学則第6条第2項の規定に基づき、「大学院統合新領域学府における教育研究上の目的に関する内規」として規定し、本学府のホームページでも公開している。

資料1-1-A 学府・専攻の教育目的

	コース/分野	教育目的
学府	—	科学的な知の統合と創造を通じて、現代の科学や社会が問いかける複合的かつ根源的な課題の究明に取り組み、その知的成果を社会に還元するとともに、自らそのような知の担い手として活躍する高度な専門人材を組織的に養成する。
ライブラリーサイエンス専攻	—	ICT環境の真ただ中におかれる現代情報社会の急速な進展に対応するため、ユーザーの視点に立った情報の管理と提供を確保し、同時に知の創造と継承を支えるあらたな「場」（これを「ライブラリー」と呼ぶ）に求められる高度な専門人材を養成する。

URL : http://www.ifs.kyushu-u.ac.jp/pages/ifs_01.html (学府)

http://www.ifs.kyushu-u.ac.jp/pages/ifs_01_06.html (ライブラリーサイエンス専攻)

本専攻の修士課程学生定員、入学者の状況並びに在学者の状況は資料1-1-B及び資料1-1-Cに示すとおりであり、充足率を適切に満たしている。

資料1-1-B 入学者の状況

入学定員	平成23年度					平成24年度				
	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	入学定員超過率	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	入学定員超過率
10	17	16	12	9	90%	27	27	16	14	140%

※平成24年度1年次の入学者数には、転学府者1名を含む。

資料 1-1-C 収容定員と在籍者の状況

入学定員	収容定員	平成 23 年度				平成 24 年度			
		在籍者数			充足率	在籍者数			充足率
		1 年次	2 年次	計		1 年次	2 年次	計	
10	20	9 (1)		9 (1)	90%	14 (3)	9 (1)	23 (4)	115%

※ () は外国人留学生数であり、内数。

※平成 24 年度 1 年次の在籍者数には、転学府者 1 名を含む。

平成 22 年 10 月末に本専攻修士課程の設置が認可された後、設置及び学生募集に係る様々な広報活動を行った。広報期間を十分に確保した後、平成 23 年 1 月に第 1 期生となる平成 23 年 4 月入学者の入学試験を実施した。時期的に学内外の他の大学院が行う入学試験からは大きく遅れをとったにもかかわらず、入学定員を超える志願者からの応募があった。また、翌平成 23 年度に実施した第 2 期生（平成 24 年 4 月入学）の入学試験においては、27 名の志願者があった。このことは、本学府における本専攻が教授する新たな学問分野に対する社会的期待及び人材育成に係る社会的ニーズの高さが示されたものと考えている。

なお、合格者の入学／辞退の動向を可能な範囲で推測し、本学府のアドミッションポリシーに叶う志願者を合格とした（平成 23 年度合格者 12 名、平成 24 年度合格者 16 名）。結果として、入学者数は、平成 23 年度 9 名、平成 24 年度 14 名、充足率はほぼ 100% に近く、本学府における教育遂行上の支障はなく、学府及び各専攻の目的に沿った人材育成が展開されている。今後は、志願者及び入学者の動向を注視しつつ適正な定員管理を行っていく。

資料 1-1-D 専任教員配置状況及び所属研究院等

(各年度 4 月 1 日現在)

専任教員数			学生数		専任教員 1 人あたりの学生数		所属研究院
職名	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	
教授	7	7	9	23	0.82	2.09	大学文書館 (1 名) 法学研究院 (1 名) 比較社会文化研究院 (1 名) 人文科学研究院 (2 名) 附属図書館付設記録資料館 (1 名) システム情報科学研究院 (1 名) 医学研究院 (1 名) 情報基盤研究開発センター (1 名) 附属図書館 (2 名)
准教授	3	3					
講師	1	1					
助教	0	0					
合計	11	11					

本専攻に配置されている専任教員数は、資料1-1-Dに示すとおりである。専任教員一人当たりの学生数からみて、教育課程の遂行に必要な教員を十分に確保している。

また、大学院重点化している本学では、学校教育法第66条ただし書きにもとづき、平成12年度に全国初となる「学府・研究院制度」を設けた。これは、大学院の教育研究組織である「研究科」を大学院の教育組織としての「学府」と教員の所属する研究組織である「研究院」とに分離して、相互の柔軟な連携を可能にする制度であり、本制度を整備したことで本学では研究院の枠を超えた多様な教員が学府教育に参画することが可能となった。本学府及び本専攻では、前掲資料1-1-Aに示した学府及び本専攻の教育目的を達成するため、この「学府・研究院制度」を積極的に活用し、専門分野を異にする様々な教員が専任教員として参画する体制をとっている（資料1-1-D）。また、本学府の運営は構成員からなる学府教授会において行われている。

なお、本専攻を担当する研究指導教員数及び研究指導補助教員数は、資料1-1-Eに示すとおりであり、大学院設置基準を満たしている。

資料1-1-E 研究指導教員等の配置状況（各年度4月1日現在）

		大学院指導教員数							大学院設置基準上の 必要教員数	うち 研究指導 教員
		研究指導教員数					研究指導補助 教員数	合計		
		教授	准教授	講師	助教	計				
H23年度	修士課程	7	2	1	0	10	1	11	8	4
H24年度	修士課程	7	2	1	0	10	1	11	8	4

また、本学府における本専攻には、専門領域が専任教員と異なる学内教員や他の国公立大学の教員及び企業等の外部講師も多数参画している（資料1-1-F）。これは、各方面で優れた実績を有する講師を本専攻に迎え、学際的かつ多面的な教育研究活動を展開し、本学府の特徴である「科学的な知の統合と創造」に取り組んでいくためである。

資料1-1-F 非常勤講師配置状況

	非常勤講師 (学内)	非常勤講師（学外）						合計
		企業	他大学	官公庁・自治体	研究機関	その他	小計	
H23年度	7	1	3	0	0	0	4	11
H24年度	5	1	3	0	0	1	5	10

観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点に係る状況)

本学府における教育上の課題は、学府教授会、学府長・専攻長会議、各専攻の専攻運営会議、入試WG及び教務WGにて扱われている。

学府教授会では、学年暦の策定、入学試験の実施、学位授与方針、研究生の受入れ、奨学金の取扱い方針決定など、学府に共通する課題に関する協議がなされている。

また、本学府で行われる教育研究活動は、各専攻がそれぞれ自律的に展開していることから、授業科目の実施方法や授業の改善に向けた検討等は各専攻の専攻運営会議において協議されている。本専攻では、複数の教員と学生が関与する実践的な実習、演習からなる「PTL・インターンシップ科目」のテーマ査定や実施方法をはじめとする様々な検討を行っている。その他、入学試験に係る実務的な対応は入試WG、カリキュラム等教務に係る実務的な対応は教務WGにおいて検討を重ねている。

なお、本学府では、専攻間の調整を図るために、月に1回程度、学府長・専攻長会議を開催している。本会議においては、例えば、「学府共通科目」の教育内容や担当教員の選定を行うなどの取り組みを行っている。その他、各専攻が開講するインターンシップの実施方法や学生の就職対応、学生の退学や長期履修に関する取り扱いに関する意見交換等を行っている。これにより、専攻間にまたがる課題の実務的な対応を図ると共に、情報共有による円滑な学府専攻運営を行っている。

以上のとおり、本学府及び本専攻では教育内容や教育方法の改善に向けた実施体制を組織的に構築しており、学府及び専攻の教育の質の向上に向けた取り組みを行っている。(資料1-2-A)。

また、本学府におけるFDは、各専攻において計画し実施されている。具体的な本専攻内におけるFD活動については、本学における全学的な組織である「教務委員会」を活用し、学生の授業評価及び外部評価を踏まえながら授業内容、教材の開発と教育スキルの向上を図っている。さらに、教員と学生の合同懇談会(ラウンドテーブル)を開催し、学生の意見や要望等を教育研究活動に反映していく体制を構築したりした(資料1-2-B)。

資料 1-2-A 教育内容、教育方法の改善に向けた取組

	教育上の課題	実施目的	改善に向けた実施体制と取組	実施実績
学 府	学府共通科目の新 規開講	学府共通科目を新 たに開講すること により、教育目的 である「科学的な 知の統合と創造」 を行うプロセスを 修得し、その能力 を養成する。また 、専攻にとられず に学生が交流する 協働環境を醸成・ 発揮する。	〔協議の実施体制〕 学府長・専攻長会 議 学府教授会 〔取組み〕 学府長・専攻長会 議において教育目 的や内容の精査、 担当教員の選考を 行い、学府教授会 において審議した。	平成22年度に学府 共通科目「科学の 統合方法論」（必 修科目）を新規に 開講した。 対 象：修士課程1 年 開講時期：前期 教育内容：学府の 教育目的を達成す るために、科学的 な知の研究方法や 知の統合のあり方 に関して、科学的 探求の仕組みとそ のプロセス、異な る科学的探求の方 法や知の転換・統 合について講義を 行うと共に、一部 演習形式も取り入 れることにより、 両専攻の学生によ る協働環境を整え る。本学府教員3 名が担当した。平 成23年度にライブ ラリーサイエンス 専攻が新たに設 置されたことから 、新専攻でも科目 を開講し、担当教 員も同専攻から1 名加えた。
ラ イ ブ ラ リ ー サ イ エ ン ス 専 攻	PTL・インターン シップ科目の充実	実践的教育により 、ユーザーのニー ズや知の創造・継 承プロセスを把握 する能力を身に付 けることができる 。インターンシッ プでは現場で現状 における課題を認 識するための科目 である。	〔実施体制〕 ライブラリーサイ エンス専攻運営会 議 〔取組み〕 専門分野を異にす る複数の教員と学 生が、共通のテー マのもとに共同し て取り組むチーム ランニング演習で ある PTL・ユー ザーのニーズや知 の創造・継承プロ セスを把握する能 力を身に付けると ともに、現場で現 状における課題を 認識するため大学 や企業等に一定期 間、研究生として 働くインターンシ ップ科目は設置当 初から実施してい る教育方法であり 、今後、更なる充 実発展のため、専 攻運営会議主導の もと、全教員・全 学生が集まり検討 するラウンドテー ブルを定期的に行 い、改善に取り組 んでいる（資料1- 2-B）。 本ミーティングで は、PTL・インター ンシップ科目以外 の授業等の教育内 容、方法においても 今後の更なる発展 のため、検討を行 っている。	多様な学生の実情 を念頭に、たとえ ば職場経験を有す る社会人については PTLのみの選択も 可能となるよう、 選択必修としている 。 次年度以降も更な る充実を図るため 、授業の成果物の 公開方法等について 検討する予定であ る。

資料1-2-B FDの開催実績

(平成23年度、平成24年度)

<p>1. 教員と学生との合同懇談会（ラウンドテーブル）：平成23年度 2回、平成24年度 2回 参加者：各回約14名（23年度） 約20名（24年度）</p> <p>内 容：1年に2回、全教員、学生参加で開催し、専攻の教育態勢、運営等について、学生からの意見を聴取して、教育研究活動の改善につなげている。</p>

資料1-2-C 全学FDの実施状況

	テーマ
平成23年度	新任教員の研修、教育の質向上支援プログラム成果発表会、心の危機の予防と連携～われわれ教職員にできること
平成24年度	新任教員の研修、教育、学習を次のステップへ（教育の質向上支援プログラム成果発表会）、教職員向けメンタルヘルス研修会

(2)分析項目に係る自己評価

ライブラリーサイエンス専攻は、教育目的を明確にし、それに沿った運営を行っている。

学生の在籍状況については、本学府のアドミッションポリシーに叶う人材を十分に確保できている。また、教員数については、本専攻の教育研究に支障がない十分な数を配置しており、さらに教員の新規採用を行うことで、教育研究体制の充実が図られている。これらの指導体制のもとで、本専攻において教育目的に沿った人材育成が展開されている。

また、教授会及び本専攻に置かれる各種会議において、学府の教育方法を改善するための検討がなされており、修士課程2年間の実態に応じて常に改善を行える場を設けているなど、機能的な教育組織が編成され、実際に教育目的を達成するための改善が図られている。

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 教育課程の編成

(観点に係る状況)

本学府では、養成する人材像と学問分野・職業分野の特徴を踏まえて教育目的（前掲資料1-1-A）を設定し、ライブラリーサイエンス専攻では資料2-1-Aのように学府規則において修了要件を定め、授与する学位として、修士（ライブラリーサイエンス）と定めている。

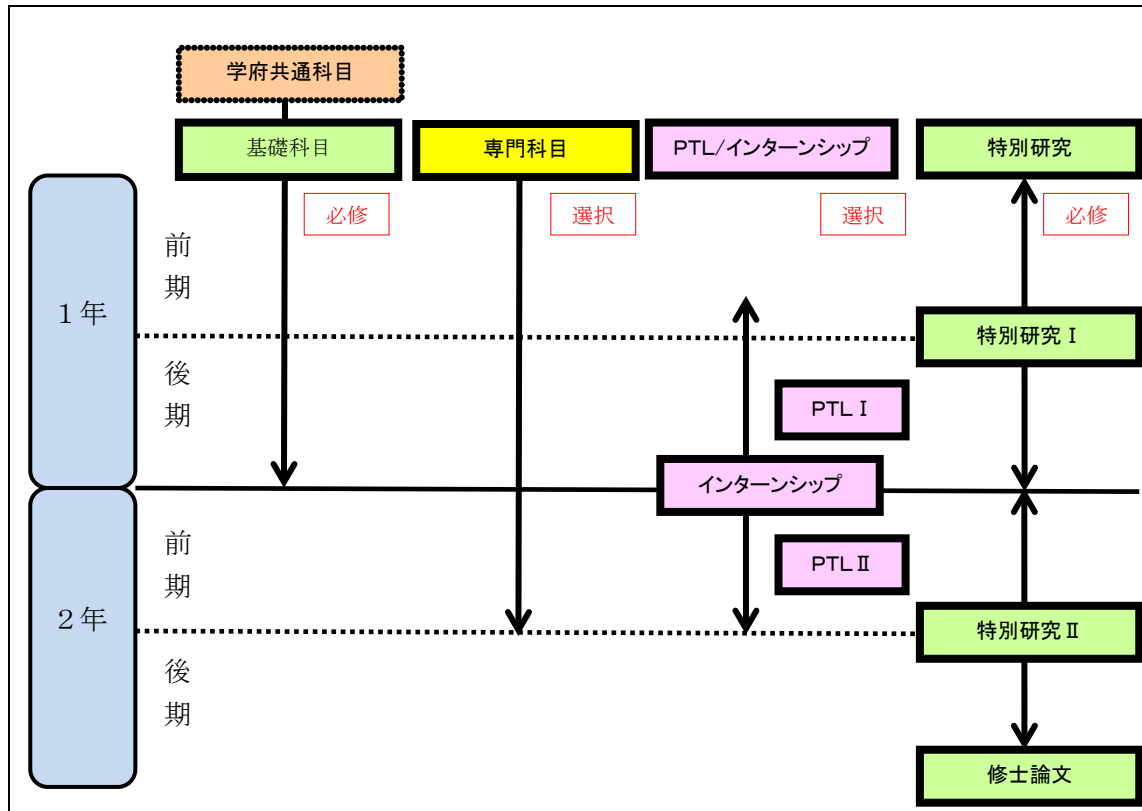
資料2-1-A ライブラリーサイエンス専攻修了要件

修了要件
修士課程に2年以上在学し、平成23年度及び平成24年度入学者Iの1から6に掲げる単位を含む40単位以上を修得し、必要な研究指導を受けた上、本学府教授会の行う修士論文の審査及び最終試験に合格すること。
I（平成23年度及び平成24年度入学者）
1. 科目区分「学府共通科目」について1科目1単位
2. 科目区分「特別研究」について2科目6単位
3. 科目区分「基礎科目」について5科目10単位
4. 科目区分「PTL・インターンシップ科目」について2科目3単位又は2科目4単位
5. 科目区分「専門科目」について9科目18単位
6. 次に掲げる科目について2単位以上（ただし、（2）及び（3）の授業科目で課程修了の要件となる単位に含めることができるのは、2単位までとする。）
（1）ライブラリーサイエンス専攻の授業科目（ただし、上記2から5までの単位として修得した単位を除く）
（2）本学府他専攻の授業科目
（3）他学府の授業科目（大学院共通教育科目を含む。）
ただし、本学府教授会が認めるときは、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については、修士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。

出典：大学院統合新領域学府規則

本専攻では、ICT環境の真ただ中におかれる現代情報社会の急速な進展に対応するため、ユーザーの視点に立った情報の管理と提供を確保し、同時に知の創造と継承を支えるあらたな「場」（これを「ライブラリー」と呼ぶ）に求められる高度な専門人材を育成するため、資料2-1-Bに示す履修体系に基づき、資料2-1-Cに示す授業科目を配置している。

資料 2-1-B 修士課程の履修体系図



資料 2-1-C 修士課程の科目構成

科目区分	授業科目の名称	必修・選択	授業形態
学府共通科目	科学の統合方法論 [1 単位]	必修	講義
特別研究	特別研究 I [2 単位]、特別研究 II [4 単位]	必修	演習
基礎科目	情報マネジメント論、情報システム論、情報サービス論、 情報法制論、学習科学 [各 2 単位]	選択必修	講義
PTL/インターン シップ科目	ライブラリーサイエンス PTL I、ライブラリーサイエンス PTL II [各 2 単位]、インターンシップ [1 単位]	選択必修	実験・実習
専門科目	情報テキスト論、情報リテラシー論、インターネットの情報法制、 コミュニケーション論、図書館マネジメント論、図書館政策論、レ ファレンスサービス論、ライブラリー資料論、ライブラリー特殊資 料論、文書記録マネジメント論、文書記録管理政策論、文書記録活 動論、文書記録資料論、文書記録特殊資料論、情報評価分析論、情 報組織化論、数理統計、自然言語解析、データマイニング、情報セ キュリティ論、情報サービスと著作権 (平成 24 年度～)、情報リ テラシー演習、コミュニケーション演習、レファレンスサービス演 習、ライブラリー資料演習、ライブラリー特殊資料演習、文書記録 資料演習、文書記録特殊資料演習、データベース演習、構造化文書 運用演習、外国語資料講読演習 I、外国語資料講読演習 II、外国語 資料講読演習 III [各 2 単位]	選択	講義/ 演習

学府及び本専攻の教育目的を達成するため、特徴的な教育課程を編成している。

本専攻では、文字情報管理の面で大きな研究蓄積を有する2つの学問領域、「図書館情報学」と「アーカイブス学(文書記録管理学)」を基盤として、法学、学習科学、情報学等の知見を交えつつ、ユーザーの視点にたった情報の管理と提供を可能とする、新たな知の創造と継承の「場」(=「ライブラリー」)を教育研究の対象としている。情報の管理と提供の「場」を科学する試みを展開することに、また文献著作と文書記録の両者を統合してとりあつかうことは、我が国では初めてのことである。

本専攻が対象とする情報はあらゆる領域に関係することから、入学者も多様な専門と背景を持つ人材が予想される。このため、多様な教育ニーズに対応できる履修モデルを可能とするカリキュラムを組むと共に、指導教員は、学生一人ひとりの適性にに応じて、きめ細かい履修指導を行っている。教育方法にも工夫をこらし、専門分野を異にする複数の教員と学生が、共通のテーマに協力して取り組むチームランニング(PTL)やインターンシップ等を用いながら、実践的な知の修得を図っている。

このように、大学院生に求められる知識や理論を理解し、高度な専門知識と実践的な研究能力を養うことができるように教育課程が編成されている。また、本専攻の運営会議等において、修了要件や科目構成等について常に検討を行い、議論を重ねた上でカリキュラムの改正等を行っている。平成24年度には著作権関連の教育をより充実させるため、新たに「情報サービスと著作権」を専門科目にした。

資料2-1-D 教育課程編成の特徴

教育課程編成上の特徴
<p>本専攻では、修士論文を兼ねる「特別研究」、「学府共通科目」、専攻全体の基礎となる「基礎科目」、複数の教員と学生が関与する実践的な実習、演習からなる「PTL・インターンシップ科目」、学生のニーズと専任教員の履修指導により選択される「専門科目」からなる、5つの科目区分を設定している。「特別研究」、「学府共通科目」、「基礎科目」は、その性格から必修としている。「PTL・インターンシップ」については、多様な学生の実情を念頭に、たとえば職場経験を有する社会人についてはPTLのみの選択も可能となるよう、選択必修としている。「専門科目」は、多様な学生のニーズに応えるために選択とする。</p> <p>基礎科目および専門科目は、基本的には、「ライブラリーサイエンス」を構成する関連学問分野に関する科目である。これらの科目により、情報の管理・提供に関するマネジメント、サービス、コンテンツ、システムの4領域すべてを教育し、同時に情報の管理・提供を実現するための情報科学に関する教育を行っている。さらにユーザーのニーズや知の創造・継承プロセスを把握するための理論や手法、情報に関する法制度と課題、「ライブラリー」の新たな機能の可能性に関して教育を行っている。</p>

本学府では、各専攻の特色を活かしつつ、学府の教育目的に叶う人材を養成するため、学府共通科目として修士課程1年次を対象に「科学の統合方法論」(必修科目; 1単位)を開講している。

本科目の目的や講義内容は資料2-1-Eに示すとおりであるが、本科目を履修することにより、学生は、「知の統合と創造」を図るための科学的探求の仕組みとそのプロセスや、異なる科学的探究の方法や知の転換及び統合について理解し修得することができる。また、本科目において一部演習形式を取り入れることにより、各専攻の学生が交流し協働する環境をも整えることができ、専門分野が異なる学生間の知の交流をも図ることができる。

資料 2 - 1 - E 学府共通科目「科学の統合方法論」

講義の目的	<p>本学府は複合的で学際的な新領域の課題を解決するため、細分化された専門的な知を統合し新たな科学を創成することを目的として設置されており、各専攻ともに文理両棲の科目によって編成されている。このことを踏まえて科学的知の研究手法や知の統合のあり方について理解しておくことは重要である。そのためにここでは、科学的探求の仕組みとそのプロセスや、異なる科学的探究の方法や知の転換および統合について理解し修得することを目指す。</p>
講義の内容	<p>科学的探究の思想とステップは専門領域を問わず共通する点が多いが、具体的な研究手法は各領域で異なる。そこで、それぞれの研究方法について理解をして、知の統合と新たな知を創造する方法を学ぶ。まず、ユーザー感性学専攻におけるヒトの感覚・情動研究の方法論（実験計画法、測定法など）や研究事例、また人間理解のための研究方法である観察法について体験的理解を深める。続いて、自動車を対象にして、科学的な知の発想とそれを活かす知の具象化に至る一連の知の応用と転換のプロセス、さらに知の可視化とその管理（知財管理）を学び、最後に知の統合に必要なテキスト情報の管理と提供のあり方について考察する。</p>

観点 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

本学府ライブラリーサイエンス専攻の設置にあたっては、時代の要請に適合した教育課程を編成するため、先ず多方面のニーズ調査（資料2-2-A）を行った。

資料2-2-A ニーズ調査の結果

調査概要	調査結果
<p>[対象機関] ①大手企業の総務担当者</p> <p>[実施時期] 平成22年4月</p> <p>[実施方法] 書面によるアンケート</p> <p>[対象期間] ②全国の国立大学図書館、九州の公立・私立大学図書館</p> <p>③学術出版社、情報管理提供サービス業・代理店等、アウトソーシング業、図書館システムベンダー、企業の情報支援部門の管理者。採用担当等</p> <p>[実施時期] 平成22年8月16日～25日</p> <p>[実施方法] メールによる依頼、Webアンケートシステム (REAS) による回答</p> <p>[対象機関] ①学部学生（一番関心が高いと思われる文学部を対象とした） 別府大学文学部所属の学部3年生、九州大学文学部2～4年生</p> <p>②福岡県佐賀県地区大学図書館、福岡県地区公共図書館、九州地区専門図書館に所属する図書館職員</p> <p>[実施時期] 平成22年3月、5月</p> <p>[実施方法] 書面及びWEBアンケートシステムによる調査</p>	<p>【企業等によるニーズ】 情報通信技術の急速な進展により情報の生産から流通のあり方が大きく変化するなか、出版や流通、情報提供サービス等に携わる企業は常に情報の管理・提供の新たなモデルを模索し、戦略的に情報をマネジメントできる人材を求めている。また、図書館業務が館種を問わずアウトソーシングが進むなか、図書館業務を請け負う企業においても、請負規模の増大に伴い、提供する人を教育できる人材、図書館での実務経験や高い専門性を持った人材の獲得が喫緊の課題となっている。本専攻のアンケート調査でも「エンドユーザーの潜在的ニーズに基づき、新たなニーズを把握・分析する能力（マーケティング）」「利用動向やニーズに基づき、新たなモデルを企画する能力」と本専攻が目指す「ユーザーの視点に立って」情報の管理・提供をおこなう人材の重要性が裏付けられた。自由回答欄からも、「急速に進むグローバル化の中での『日本の研究活動を支える情報設計』を可能とする学問と人材育成を期待」「人材確保、あるいは人材教育・訓練の観点から大変興味深いプロジェクト」というコメントなど、本専攻への大きな期待が寄せられている。</p> <p>【図書館におけるニーズ】 専任職員数が減る傾向にある中、「専門性を有する人材の養成、確保」を組織・人員面の課題としていることが、学術情報基盤実態調査（平成21年度、文部科学省）でも明らかにされている。本専攻のアンケート調査でも、「特定の学問分野の専門的な知識」「特殊資料の整理・管理保存に関する知識・スキル」が低く本専攻で養成する人材が現場に充足されていない実情が明らかになった。</p> <p>【入学希望者の見通し】 学士については、本専攻に「入学したい」が4%、「興味がある」が80%であった。この割合から需要予測すると、たとえば、福岡県内の大規模大学（九州大学、福岡大学、西南学院大学、福岡大学）のうち、人文科学系の学生に限定した場合でも、1学年の学生数1403名で、本専攻のアンケートでの「入学したい：4%」を割り当てると、56名となる。福岡県外からの入学希望者、人文科学系以外の学生の入学希望者を考慮すると、定員10名に対する入学希望者は十分に見込めることが明らかになった。 また、図書館職員については、図書館職員として身につけた知識・技術の修得の場がない、必要とされる人材が育成されていないという現状が浮かび上がった。本専攻に入学したいかという間に、「入学したい」が13%、「興味がある」が63%であり、修学条件さえあれば、社会人学生としての入学希望者も十分見込める結果となった。</p>

資料2-2-Aに示されるとおり、本専攻では、レコードマネジメントやアーキビスト、大学図書館や専門図書館その他研究機関等でも専門的な視点ができるライブラリアン、情報の管理提供組織の管理・運営・企画を行う者など、より高度な能力・スキルを持った人材の養成を目的としており、国・地方公共団体や民間企業の文書・記録管理機関・部門、文書・記録管理を専門とする企業、図書館等、近年では情報サービス産業や図書館業務の請負企業での需要が高まっていることが分かった。

このため、本専攻ではこれらのニーズを十分に踏まえ、①教育内容、②指導体制、及び③就学環境の向上に反映させるなど、特徴的な教育体制を編成している（資料2-2-B）。

資料2-2-B 社会からの要請等に応じた教育課程

① 教育内容

社会のニーズ (資料2-2-A)	対応科目	概要
ユーザーにとって意義のある情報の管理・提供を実現し、「ライブラリー」の新たな機能や情報の利用法について探究する人材を養成するためには、現場を体験し、実践を通して現状における課題を認識し、ユーザーのニーズや知の創造・継承プロセスを把握するための能力を養うことが重要である。	PTL・インターンシップ	「ライブラリーサイエンス PTL I」では、高度情報化社会における情報の新たな提供法と利用法ならびに教育学習環境に関し、図書館などでのフィールド調査を基に課題を設定し、技術的に観点、法律上の観点から検討を行い、課題解決に向けた取り組みを行う。 「ライブラリーサイエンス PTL II」では、文献、文書・記録の垣根を取り払い、資料や情報を総合的に管理、利用するための方法論の構築に取り組む。 「インターンシップ」では、大学や企業等の現場において、一定期間、研修生として働くことで、ユーザーのニーズや知の騒動・継承プロセスを把握する能力を身に付けるとともに、現場で現状における課題を認識するための科目である。

②指導体制

社会のニーズ (資料2-2-A)	対応	概要
「ユーザーの視点」に立って情報の収集・管理・提供をおこなう人材の重要性。	異なる分野の教員からなる研究指導チームの編成、修士論文中間発表会の導入、学際的な研究・教員の観点から、副指導教員を選定し、指導教員とともに学生の修学を支える。	修士論文中間発表会を開催し、個別の研究指導がより充実した。 本専攻の学生は指導教員の履修指導のもと、履修科目の設定や修士論文作成の準備にあたる。学際的な研究・教育の観点から、学生のニーズにあった助言等を通じて学生の修学を支える。

③就学環境の向上

社会のニーズ (資料2-2-A)	対応	概要
本専攻には一定の社会人学生の入学が想定される。	教育・指導時間の工夫、インターネットを活用した対面授業の補完、長期履修制度による社会人就学の支援体制	<p>①教育・指導時間の工夫 一部の授業においては、6時限目に開講する。あるいは夏季・冬季休業期間などに集中講義として開講するなど、相談の上、勤務時間等に応じた履修にできる限り対応する。</p> <p>②インターネットを活用した対面授業の補完 一部の授業については、対面授業の補完として、講義内容を収録したビデオ映像や講義スライドの提供、教員と学生間の質疑応答、レポート課題の通知や回収、研究指導に、九州大学 Web 学習システムや電子メールを利用し、遠隔地や在宅での学習・研究活動を支援する。</p> <p>③長期履修制度の導入 フルタイムで勤務する社会人学生に対して長期履修制度を活用し、3年間の履修により課程の修了を可能とする。</p>

さらに、本専攻では、特定の専門事項について研究する研究生を資料2-2-Cのとおり受け入れている。

資料2-2-C 研究生の在籍状況（各年度11月1日現在）

H23年度	H24年度	合計
1	1	2

(2)分析項目に係る自己評価

本学府では、養成する人材像と学問分野・職業分野の特徴を踏まえて教育目的、修了要件及び学位を定めている。また、各専攻に特徴的な科目を設け、教育目的に沿った人材を養成できる履修プログラムを設けている。

なお、本専攻では、資料2-2-Aの調査結果に示される、社会ニーズに十分に答えるため、高度な専門知識を修得する講義科目のみならず、社会との連携により実践的な知識を修得する演習科目を充実させ、複眼的な視野を磨くための指導制度を導入した。

また、学府及び本専攻の教育目的を達成するために、開講科目の見直しを行うと共に、「学府共通科目」「専攻共通科目」「コース／分野専門科目」の区分を設け体系的な教育課程を整備している。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

本学府では、学府及び専攻の教育目的（前掲資料1-1-A）を達成するために、高度な専門的知識を教授するだけでなく、実践的な知識を修得するためのインターンシップやフィールドワークなど授業形態上の特色を取り入れながら（資料3-1-A、B、C）、ライブラリーサイエンス専攻における学問の特性を重視し、授業科目を資料3-1-Dのとおりバランスを考慮して配置している。

学生はこれらの科目を体系的に履修することにより、高度な専門知識を修得するだけでなく、実社会が抱える現実の課題に直面し、その課題を複眼的な視点で解決していく能力をも修得していく。

資料3-1-A 授業形態上の特色

授業形態	特色
特別研究	<p>特別研究は、大学院生一人ひとりが専攻の学修を総括するために実施する研究である。このため必修科目である。「特別研究Ⅰ」では、ライブラリーサイエンスについての広い視野の下に、自主的な課題設定、課題解決のための仮設考察、検証方法の決定、これらの指導教員への説明を行い、「特別研究Ⅱ」では特別研究Ⅰに基づき、構築した仮説を検証・吟味して成果をまとめ説明を行う。この科目においては、学生は論文、成果発表等により本専攻で涵養した能力を総合的に実証することが求められる。特別研究では、修士論文の研究テーマを踏まえた個別指導が行われる。</p> <p>平成23年度入学者の修士論文のテーマは以下のとおりである。</p> <p>「プリント教材を共有するためのプラットフォームの設計」「現代アーカイブズとレコード・コンティニューム理論」「変わりゆく電子環境下における音楽アーティスト自身による音情報の管理・提供に関する研究」「大学内システム連携におけるデータ同定の一手法の提案」</p>
PTL	<p>PTL科目は、専門分野を異にする複数の教員と学生が、共通のテーマのもとに、共同して取り組むチームラーニング型演習であり、学生の主体的な課題設定と実践が求められる。PTL科目による実践的教育により、ユーザーのニーズや知の創造・継承プロセスを把握する能力を身に付けることができる。また、PTL科目での活動を通して、教員や他の学生との知の交流により、新たな知の創造を促し、「ライブラリーサイエンス」を教員とともに開拓する。（資料3-1-B）。</p>
インターンシップ	<p>大学や企業等の現場において、一定期間、研修生として働くことで、ユーザーのニーズや知の創造・継承プロセスを把握する能力を身に付けるとともに、現場で現状における課題を認識するための科目である（資料3-1-C）。</p>

資料3-1-B① 「PTL」の実績

(平成23年度)

実施形態	<p>PTLⅠでは、高度情報化社会における情報の新たな提供法と利用法ならびに教育学習環境に関し、図書館などでのフィールド調査を基に課題を設定し、技術的、方法論的な観点、および、法的な観点からの検討をおこない、課題解決に向けた取り組みを行う。</p> <p>PTLⅡでは、文献、文書・記録の垣根を取り払い、資料や情報を総合的に管理、利用す</p>
------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	るための方法論の構築に取り組む。
テーマ例、連携先、演習内容	「図書館が提供する文献検索システム」「レファレンスサービス」「電子ジャーナル」「ラーニングコモンズ等の教育学習環境」
学生による評価	「満足大」というアンケート結果が多く、関心を持って取り組んだようである。

資料3-1-B② 「PTL」の実績

(平成24年度)

実施形態	PTL Iでは、高度情報化社会における情報の新たな提供法と利用法ならびに教育学習環境に関し、図書館などでのフィールド調査を基に課題を設定し、技術的、方法論的な観点、および、法的な観点からの検討をおこない、課題解決に向けた取り組みを行う。 PTL IIでは、文献、文書・記録の垣根を取り払い、資料や情報を総合的に管理、利用するための方法論の構築に取り組む。
テーマ例、連携先、演習内容	「図書館が提供する文献検索システム」「レファレンスサービス」「電子ジャーナル」「ラーニングコモンズ等の教育学習環境」
学生による評価	「満足」という評価であるが、平成23年度よりもアンケート回収率が悪かった。

資料3-1-C① 「インターンシップ」の実績

(平成23年度)

派遣人数	修士課程学生 7名
派遣期間	主に平成23年 8月～9月など2週間相当
研究テーマ(例)	国立公文書館の業務(国立公文書館) 専門図書館(大学も含む)における閲覧業務(九州経済調査協会、九州大学) 企業自治体の文書管理(麻生レコードマネジメント)
学生による評価	関心を持って取り組んでおり、評価が高い。

資料3-1-C② 「インターンシップ」の実績

(平成24年度)

派遣人数	修士課程学生 14名
派遣期間	主に平成24年 9月～10月など2週間相当
研究テーマ(例)	国立公文書館の業務(国立公文書館) 専門図書館(大学も含む)における閲覧業務(九州経済調査協会、九州大学、福岡アメリカンセンター) 企業自治体の文書管理(麻生レコードマネジメント)
学生による評価	関心を持って取り組み、新たな発見もあり、評価が高い。

資料3-1-D 教育科目の授業形態別配置数

平成23年度				平成24年度			
講義	演習	実験・実習	合計	講義	演習	実験・実習	合計
26	16	1	43	27	16	1	44

担当授業科目に関しては、教授・准教授は主要授業科目を含めた科目を、講師・非常勤講師は主要授業科目以外の科目を担当している。本学府及び本専攻では、学際的かつ多面的な教育研究活動を展開し、「科学的な知の統合と創造」に取り組んでいくために、専任教員の他、専門領域が重なる学内教員や国公立大学連携及び産学官連携に基づいた学外教員からなる教員組織を編成している（前掲資料1-1-F）。

また、本専攻のシラバスは資料3-1-Eに示すとおり作成しており、学内から閲覧可能なホームページ上で公開している。

資料3-1-E シラバス（例）

授業科目区分	専門科目	授業対象学生	1年次 選択
授業科目名	図書館マネジメント論		
講義題目	Library Management		
授業方法及び開講学期等	前期 火曜日 3時限	単位数	2単位
通常授業・集中講義・臨時	通常授業		
担当教員 渡邊 由紀子	履修条件		
授業の概要	図書館経営・管理に関する講義である。ここでは、図書館、司書、その他の図書館職員、そして図書館サービスにおける効果的なアドボカシーの重要性についての認識を得ることが目標である。具体的には、図書館や他の情報機関における企画と予算の原則、効果的な人事実務と人的リソース開発の原則、図書館サービスやそのアウトカムを査定・評価するために必要な概念と方法、図書館や他の情報機関の実践家の継続的な専門性の向上の必要性、リーダーシップ等について理論と実践を学ぶ。		
全体の教育目標	図書館マネジメントに関する現状と諸課題、特にユーザーの視点に立った情報の管理・提供を行う組織としての図書館の課題について検討し、組織における問題解決、戦略立案および指導に関する提案ができる視点を持つようにする。		
個別の学習目標	ユーザーにとって真に意義ある情報の管理・提供という観点から、図書館マネジメントの意義と必要性、図書館の経営資源、組織のあり方、業務とサービスの評価方法等に関する理論と実際について、批判的に再検討する。		
授業計画	第1回 図書館マネジメントの意義と必要性 第2回 ハイブリッド環境下の図書館業務の理論と実際		

第3回	図書館の組織と運営
第4回	図書館運営の企画と予算管理
第5回	図書館の施設・設備計画
第6回	図書館のコレクション構築
第7回	図書館におけるリスクマネジメント
第8回	図書館職員の専門性向上と人材開発
第9回	図書館の管理運営形態の多様化とその問題点
第10回	図書館コンソーシアムの活動
第11回	図書館マーケティングの必要性
第12回	図書館におけるアドボカシーの重要性
第13回	図書館業務とサービスの評価方法(1)
第14回	図書館業務とサービスの評価方法(2)
第15回	今後の図書館マネジメントのあり方
キーワード 図書館、マネジメント、組織、予算、施設・設備、人材開発、危機管理、マーケティング、コンソーシアム、アドボカシー、評価、リーダーシップ	
授業の進め方 講義用資料に基づき講義形式で行うが、学生は担当箇所を授業中に発表し、議論することがある。	
教科書及び参考図書 授業時に適宜参考文献を指示する。	
学習相談 随時応じる。	
試験・成績評価等 出席・授業への参加姿勢(50%)、レポート(50%)により評価する。	
その他	

URL : <http://syllabus.kyushu-u.ac.jp/search/preview.php?code=1368033142> (ライブラリーサイエンス専攻)

本学府においては、科学的な知の統合と創造を通じて、現代社会が抱える複合的かつ根源的な課題に対し、自らそのような知の担い手として活躍する高度な専門人材を組織的に養成するために、本専攻において特徴的な研究指導が行われている。

本専攻では、主指導教員と副指導教員できる限り異なる分野で構成し、幅広い視野に立って、学生を教育・指導できるように取り組んでいる。また、修士論文の中間発表会の開催による研究指導も、多くの教員が参加して行っている。

このように、本専攻においては、研究指導上の多様な工夫がなされた研究指導が日常的に行われている。

また、学生の教育研究能力の向上を図るためにTA制度を活用している。平成23年度及び平成24年度におけるTAの採用状況は資料3-1-Gに示すとおりである。

資料3-1-G TAの採用状況

平成23年度	平成24年度
2	2

観点 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

本専攻では、学生の自主的な学習を促すために、シラバスに自主学習に有用な情報を記載して公開（前掲資料3-1-D）すると共に、本専攻の理念の一つである実践型教育を実現するために、全学生にiPadを貸与し、最新の情報教育環境を整備するほか、本学中央図書館内に演習室及び専用の院生閲覧室を整備している（資料3-2-A）。

また、本学府及び本専攻は、その学問分野において我が国においても類を見ない大学院である。このため、入学直後に新入生オリエンテーション（資料3-2-B）を開催し、本専攻の特徴等を学生に説明し、学生が今後本専攻において展開する教育研究活動の動機付けを行っている。また、併せて履修ガイダンスを行い、本専攻における教育研究活動にスムーズに取り組んでいくことができるよう、授業科目の体系や履修方法、修了要件などについて説明している。更に、入学直後に主指導教員を決定している。各教員の予定研究テーマ、あるいは過去指導した学生の研究テーマの例、現在の修士2年生の研究テーマと指導教員の資料を入学前に送付している。これを参考に、学生は主指導教員希望調査票を提出する。1人の教員に過度に重複しない限り、基本的には希望を重視し、主指導教員を決定している。主指導教員は、履修相談、特別研究および修士論文執筆に当たっての研究指導を行い、副指導教員は、主指導教員の判断により、これを補助している。

また、修士論文の中間報告を1年次と2年次にそれぞれ行い、主副指導教員を含む多数の教員や学生の前でプレゼンテーションを行い、活発な質疑応答を通して、分析する資格や何が研究課題なのか、再認識させている。

このように、本専攻においては、学生が自ら主体的に学習することができる取組みを実施している。

資料3-2-A 院生室の整備状況

自習室数	設備
1室（旧工学部5号館4階）	ミーティングテーブル、情報コンセント、無線LAN、書架（参考図書類）

資料3-2-B 新入生オリエンテーション・履修ガイダンスの実施状況

種別	実施時期	実施対象者	実施内容
履修ガイダンス	平成23年4月8日、 平成24年4月6日	1年	・入学式終了後に、オリエンテーションを行った。 （授業科目の履修方法、学生相談、各種手続き、奨学援助等）

(2) 分析項目に係る自己評価

ライブラリーサイエンス専攻では、学府及び本専攻の教育目的を達成するために、高度な知識を教授する講義科目と実践的な知識を教授する「PTL科目」や「インターンシップ」などの演習科目を積極的に組み合わせることによって、全体としてそれぞれ特徴ある教育方法を実現している。また、教育課程の編成の趣旨に沿って適切なシラバスが作成され、活用されている。研究指導方法や研究指導に関しては、学生一人ひとりの興味・関心・進路に応じたきめ細かな指導が適切に行われている。

学生の主体的な学習を促すために院生室を更に整備すると共に、今後も本専攻において教育研究活動を行っていく動機付けとなるオリエンテーションを実施している。

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

ライブラリーサイエンス専攻の平成23年度及び平成24年度の単位取得状況は、資料4-1-Aに示すとおりとなっている。また、休学率は、資料4-1-Bに示すとおりである。

また、前掲資料1-1-Aに示す教育目的を達成するため、本専攻の学生は、講義等を通じて各専門分野における高度な専門的知識を修得するだけでなく、「PTL科目」や「インターンシップ」などの実践的な演習科目を通じて、実社会における実務的知識をも修得している（前掲資料3-1-B及び3-1-C）。これにより、講義等を通じて様々な専門的知識を修得するばかりでなく、専門的知識と実務的知識を統合させ、社会の変化に対応しうる実践的な高度な知識へと再編成していく能力も併せて養成している。

上記のとおり、平成23年度及び平成24年度に本学府に入学した学生は、全般的に学力を適切に身に付けていると判断される。

資料4-1-A 単位修得状況

学年	平成23年度			平成24年度		
	履修登録者数	単位修得者数	単位修得率	履修登録者数	単位修得者数	単位修得率
1年	188	186	98.9%	283	276	97.5%
2年	—	—	—	46	44	95.6%
全体	188	186	98.9%	329	320	97.2%

※ 履修登録者数・単位修得者数ともに延べ人数、単位修得率：単位修得者数を履修登録者数で割った比率

資料4-1-B 休学状況（各年度11月1日現在）

	平成23年度	平成24年度
休学者数（休学率）	0（0%）	1（4.3%）

※平成24年度の休学者1名は、疾病によるものである。

観点 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

学業の成果に関する学生の評価は、日常的な指導教員による聞き取りや授業アンケートなどにより得られ、これらの結果から満足度を評価するとともに、教育改善のためのデータとして活用されている。

本専攻における授業アンケートは、資料4-2-Aのような内容で実施されている。このうち、到達度や満足度を示す項目についての集計結果を、資料4-2-Bに示す。

アンケート結果からも、本専攻の学生は高い授業の到達度や満足度をもっていることが分かる。また、半数以上の学生が「専門領域についての知識が得られた」「将来役に立つと思った」と回答していることから、学生は専門知識を着実に修得していると言える。なお、授

業に対する改善・要望意見については、本専攻の教務WG及び専攻運営会議等において取り上げ、次年度以降の授業に反映させることとしている。

資料4-2-A 授業アンケートの内容

目 的	授業の質の向上に資するため、授業科目毎に学生による授業評価を行う。
実施対象	ライブラリーサイエンス専攻 大学院生 (回収率:平成23年度 69%、平成24年度 42%)
実施時期	授業期間終了後から2週間以内に提出
内 容	<p>1. この授業に関するあなた自身について</p> <p>(1) 欠席は何回ですか? ①欠席なし ②欠席1~3回 ③欠席4回以上</p> <p>(2) 授業1回あたり予習・復習をどの程度しましたか? ①1時間以内 ②30分から1時間 ③30分以下 ④まったくしなかった</p> <p>(3) シラバス(授業計画)を利用しましたか? ①かなりした ②ある程度した ③あまりしなかった ④シラバスのことを知らなかった</p> <p>(4) 授業内容が分からないときどうしましたか?(複数回答可) ①教員に質問した ②友人・先輩に質問した ③自分で調べた ④何もしなかった ⑤その他</p> <p>(5) 授業の内容は理解できましたか? ①よく理解できた ②ほぼ理解できた ③あまり理解できなかった</p> <p>2. この授業について</p> <p>(1) 授業内容はシラバスに記載された内容と一致していましたか? ①よく一致していた ②ほぼ一致していた ③一致していなかった ④シラバスを利用していない(あるいは覚えていない)のでわからない</p> <p>(2) 授業の進み具合はどうでしたか? ①速い ②ちょうどよい ③遅い</p> <p>(3) 授業内容の理解を助けるための教科書や教材、スライド、配布資料は適切でしたか? ①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない</p> <p>(4) ノートは取りやすかったですか? ①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない</p> <p>(5) 内容は理解しやすかったですか? ①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない</p> <p>(6) 多くの新しい知識、考え方を学ぶことができましたか? ①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない</p> <p>(7) クラスの受講態度はよかったですか? ①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない</p> <p>(8) 教員と学生間のコミュニケーションはうまくいっていたと思いますか? ①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない</p> <p>(9) 教員は授業の準備をよくしていたと思いますか? ①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない</p> <p>(10) 教員は学生に興味を抱かせるような努力をしていたと思いますか? ①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない</p> <p>(11) 及び (12) は当該科目がPTL科目の場合のみ回答</p> <p>(11) PTLでの教員の指導は、プロジェクトの推進に対して効果的であったと思いますか? ①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない</p> <p>(12) PTLでの課題は、PTLの目標・目的を達成するのに適切であったと思いますか? ①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない</p>

	(13) 総合的に判断して、この授業の満足度はどうですか？ ①高い ②普通 ③低い
	<p>3. この授業を受けてよかったと思うこと（複数回答可）</p> <p>① 専門領域についての知識が得られた ② 将来役に立つと思った</p> <p>③ 関連する領域に興味を持つようになった ④ 将来の進路を決めるうえで役に立った</p> <p>⑤ 勉学に対する意欲がわいた ⑥ 先生に対する親近感もてた</p> <p>その他（以下に記入してください）</p> <p>4. この授業の改善について要望したいこと（複数回答可）</p> <p>① もっとレベルの高い授業をしてほしい ② 授業内容をもっと易しくしてほしい</p> <p>③ 授業に演習をとり入れてほしい ④ 授業テーマ・目標を明確にしてほしい</p> <p>⑤ 授業内容をもっと精選してほしい ⑥ もっと幅広い内容を扱ってほしい</p> <p>⑦ 学生の理解度を把握ながら授業を進めてほしい ⑧ 理解できるように説明に工夫がほしい</p> <p>⑨ 授業の準備をもっとしてほしい ⑩ 成績の評価基準を示してほしい</p> <p>⑪ 授業に教科書や資料を使ってほしい ⑫ 視聴覚機器を活用・改善してほしい</p> <p>⑬ シラバスに沿って進めてほしい ⑭ シラバスの内容を充実してほしい</p> <p>⑮ 教室の隅まで声が届くようにしてほしい ⑯ 読みやすい字で板書してほしい</p> <p>⑰ 板書量を少なくして欲しい ⑱ 板書量を多くして欲しい</p> <p>⑲ 授業の開始・終了時間を守ってほしい ⑳ 休講・補講を少なくしてほしい</p> <p>その他（以下に記入してください）</p>

資料4-2-B 授業アンケートの結果

質問項目	回答		
	項目	平成23年 度 (%)	平成24 年度 (%)
授業の内容は理解できましたか。	良く理解できた+ほぼ理解できた	88.6	91.9
	あまり理解できなかった	7.9	6.9
	無回答	3.5	1.2
総合的に判断して、この授業の満足度はどうですか？	高い+普通	86.5	43.4
	低い	11.6	2.5
	無回答	1.8	54.0
この授業を受けてよかったと思うこと（複数回答可）	専門領域についての知識が得られた	62.2	79.4
	将来役に立つと思った	51.7	56.6
	関連する領域に興味を持つようになった	55.4	71.3
	将来の進路を決めるうえで役に立った	12.1	10.0
	勉学に対する意欲がわいた	25.5	28.7
	先生に対する親近感もてた	21.5	34.3
	その他	0.0	2.5
この授業の改善について要	もっとレベルの高い授業をしてほしい	0.0	6.2
	授業内容をもっと易しくしてほしい	7.5	10.0

望したいこと (複数回答可)	授業に演習をとり入れてほしい	14.8	6.9
	授業テーマ・目標を明確にしてほしい	4.4	14.4
	授業内容をもっと精選してほしい	7.1	15.6
	もっと幅広い内容を扱ってほしい	7.1	13.1
	学生の理解度を把握ながら授業を進めてほしい	14.9	15.0
	理解できるように説明に工夫がほしい	8.8	13.6
	授業の準備をもっとしてほしい	3.6	2.5
	成績の評価基準を示してほしい	7.1	4.4
	授業に教科書や資料を使ってほしい	2.6	5.6
	視聴覚機器を活用・改善してほしい	4.5	0.6
	シラバスに沿って進めてほしい	0.9	0.0
	シラバスの内容を充実してほしい	1.8	0.0
	教室の隅まで声が届くようにしてほしい	1.8	1.3
	読みやすい字で板書してほしい	0.9	0.0
	板書量を少なくしてほしい	0.0	0.0
	板書量を多くしてほしい	0.0	0.0
	授業の開始・終了時間を守ってほしい	0.9	1.2
	休講・補講を少なくしてほしい	1.7	3.7
	その他	4.5	4.4
	回答なし	21.6	44.0

観点 修士課程修了後の進路の状況

(観点に係る状況)

本専攻の修士課程は、平成25年3月に設置後初となる修了者を出した。修了者の進路は資料4-3-A、就職先は資料4-3-Bのとおりである。

資料4-3-A 修了者の進路

修了者数	進学者数	就職者数				その他
		企業等	公務員	その他	計	
6	2	1		2	3	1

資料4-3-B 就職先

就職先
九州大学(テクニカルスタッフ 2名) 株式会社ジー・サーチ

本専攻修士課程修了後の就職先は、博士後期課程に2名が進学した。また2名は任期付の採用ではあるが九州大学のテクニカルスタッフとして職を得た。1名が情報提供会社の株式会社ジー・サーチに就職した。留学生1名は中国に帰国した。

(2) 分析項目に係る自己評価

本専攻では、単位修得率が極めて高く、休学率は極めて低い。

また、学生アンケートの結果に示されるように学生は高い授業の到達度や満足度をもっており、専門的知識を着実に修得し、自らが「知の統合と創造」をなしえる基盤を醸成していると言える。更に、PTLやインターンシップなど実践的な演習科目を通じて、実践的な知識も修得している。

さらに、高度な専門的人材を育成することが目的とされているが、学生の就職状況及び進学状況から、それらの目的に沿う教育が実施できていると言える。

このように、学生の学業の成果・効果が総合的にあがっていることが認められ、本専攻の教育目的を達成する教育活動が十分に展開されていると考えられる。

IV ライブラリーサイエンス専攻の新たな取り組み

ライブラリーサイエンス専攻においては、前述した項目ごとの分析のとおり、本専攻の教育研究目的に沿った様々な取り組みが実施されているが、さらなる向上を図るため、次のとおり改善を行うこととした。

(本専攻における取り組み)

- ・「情報サービスと著作権」科目の追加

著作権関連の教育を充実させるために、新たに専門科目にした。

- ・講演活動

ライブラリーサイエンス という新しい研究分野の認知を確かなものとするとともに、多様な学生の志願者の確保を目指すため、講演会などを開催した。

例えば、附属図書館との共催で、定期的に「ライブラリーサイエンスの現在」と題する連続講演会を公開で開催 (<http://lss.ifs.kyushu-u.ac.jp/?cat=4>) し、ただちに九州大学YouTubeにより動画公開している。また、長尾真国立国会図書館長の講演会(平成23年6月)、レコードマネジメント専門職の産学官連携による人材養成をテーマとするシンポジウム(平成23年12月)などの講演会、シンポジウムを一般向けに開催した。

- ・就職支援

就職活動の一環として、本専攻の履修モデル1~4に該当する社会人の方々をお招きした講演会を開催した。(資料5-1-A)

各講演では仕事(業務の説明)、職種を選んだ理由及びやりがい、学生時代に勉強しておくべきこと等の話のあと、質疑応答の時間を設けた。

また、内定をとった大学院生による講演会「私の就職活動」を開催した。エントリーの書き方から面接の受け方、留学生の就職活動の留意点など多岐に及び、質疑応答を行った。

資料5-1-A 就職支援企画講演会

第1回	日時	平成23年10月2日(水) 15:00~16:00
	モデル1	記録管理の専門家
	講師	麻生レコードマネジメント株式会社 釜堀 幸氏
	参加者	12名(ライブラリーサイエンス専攻学生7名、入学予定者2名、教員3名)
第2回	日時	平成23年11月16日(水) 15:00~16:00
	モデル2	大学図書館員
	講師	九州大学附属図書館eリソースサービス室eリソースサポート係 兵藤 健志氏
	参加者	6名(ライブラリーサイエンス専攻学生4名、入学予定者1名、受験者1名)
第3回①	日時	平成23年11月30日(水) 15:00~16:00
	モデル3	情報を管理・提供する組織の管理者
	講師	丸善株式会社 教育・学術事業部 図書館アウトソーシング事業部 九州図書館サービスセンター 佐田 一兵氏、安部 結花氏
	参加者	9名(ライブラリーサイエンス専攻学生6名、転学府希望者1名、教員2名)
第3回②	日時	平成23年11月30日(水) 16:00~17:00
	モデル4	データエンジニアリングの専門家
	講師	株式会社NTTデータ九州 第一ビジネス事業部 公共ビジネス部 NALIS担当 一本 麻衣子氏
	参加者	9名(ライブラリーサイエンス専攻学生6名、転学府希望者1名、教員2名)

※本報告書に記載の事項を無断で転載されることは固くお断りします。転載を希望される場合は、利用目的を記載した申請文（様式は問わない）を下記までご送付いただきますようお願い申し上げます。

工学部等事務部総務課庶務係
〒819-0395福岡市西区元岡744番地
TEL : 092-802-2708
E-Mail : ifs@jimu.kyushu-u.ac.jp